

Artificial S 5

心臓よりゆく矢は月のほうへ

麥生田兵吾 mugyuda hyogo

母の漕ぐ自転車の後ろで、彼女の背に強くつかまりながら息子は月を見上げている。
母の若い足がどれほど自転車を進めても、夜空の月は息子を追う。息子だけを追う。
追う月は、彼をじっと見ている。その眼差しは、池に映るのと同じように、彼の心にも映し出されてた。

空と心にと、月がふたつになった。
月がふたつになったこの事を、だれが見つけることができるだろうか。彼自身にも月がふたつになったことは、わからない。
彼は、月がふたつ、なんて馬鹿げたことは思わない。
ただ「(私は) 月だ」と思っていた。
月は「月が」と叫んでいた。
母の背に。

いずれ街の軒や木々が、息子と月とを隠してしまう。眼差しが断たれる瞬間、空の無い夜以上の暗さが世界を満たすだろう。
だけどそんな暗さはほんの一瞬の出来事で、すぐにもとの明るさにもどるだろう。
道、家、電柱、自動販売機、商店、草むら、犬の糞、、ひとつひとつ判別のできる明るさがもどる。
暗さの中に、明るさがともる。
暗さ。明るさ。
暗さ。
暗さが心に残っている。
明るさの内に暗さが隠れている。

彼は、いずれ、その暗さの中に母も自分も飲み込まれる事を予感する。

いずれ？
月が言わない。

予感なんて、決定的に感じ損ねている。
今まさに息子は暗さに中にいる。息子は気づきようもない。
母の疾走する自転車は息子を乗せて、その暗闇に止まっている。
道は、家に溶けて、電柱に溶けて、自動販売機に溶けて、商店に溶けて、草むらに溶けて、犬の糞に溶けて、
全ては暗さに溶けている。

“溶けて、” のコピー&ペーストは、左から右へ、右から左へ、上から下へ、下から上へ、
右手と左手は何も掴まないままに、、溶けて、、溶けて、、溶けて、、溶けて、、溶けて、、

息子は “溶けて、” ない。
それは息子に眼差しを与えない。
息子は、見る。
息子は、「ぼく！」とさけぶ。私のモノ！と叫ぶ。
月は目を閉じる。

わたしの道、わたしの家、わたしの電柱、わたしの自動販売機、わたしの商店、わたしの草むら、わたしの犬の糞、
“わたしの” のコピー&ペーストは、左から右へ、右から左へ、上から下へ、下から上へ、
右手と左手は何も掴まないままに、、わたしの、わたしの、わたしの、わたしの、わたしの、

うるさい！
ちがう。

わたし、は目を閉じられる。

母は振り向く。

ばいばい おかあさん。

麥生田 兵吾 | mugyuda hyogo

http://hyogom.com

1976 大阪に生まれる 現在、大阪府在住
2010より「pile of photographys 」をweb上で発表を開始し、現在まで継続中。

2018 グループ展「アーカイブをアーカイブする」(みずのき美術館 / 京都)

2017 個展「Artificial S 4 / 左手に左目 | 右目に右手」(Gallery PARC / 京都)

- グループ展「showcase #番外:スナップショット、それぞれの日々」(galleryMain / 京都)
- グループ展「HAPPY SPOT FUTURE」(奈良県文化会館 / 奈良)

2016 個展「Artificial S 1 ”眠りは地平に落ちて地平”」(Gallery PARC / 京都)

- グループ展「Emerging KG+ 2016 supported by LUMIX x YellowKorner」(ロームシアター京都 / 京都)
- グループ展「showcase #5 “偶然を拾う-Serendipity”」(eN arts / 京都)
- グループ展(企画)「scene | space」(STUDIO MONAKA / 京都)

2015 個展「Artificial S 3 / Someone (Another one)comes from behind. “後ろから誰か(他 の) がやってくる”」(Gallery PARC / 京都)

2014 個展「 Artificial S 2 / Daemon」(Gallery PARC / 京都)

- グループ展 「2014 FOIL AWARD in KYOTO」(FOIL GALLERY / 京都)
- キヤノン写真新世紀2014 佳作受賞 清水穰選

2013 グループ展「溶ける魚 つづきの現実」(京都精華大学ギャラリーフロール / 京都、Gallery PARC / 京都)

2011 「THE TOKYO ART BOOK FAIR 2011」(3331千代田ARTS / 東京): 「Zine port」の一員としてZineを出品

- グループ展 「in the waitingroom」(waitingroom / 東京)

2010 「THE TOKYO ART BOOK FAIR 2010」(3331千代田ARTS / 東京): 「Zine port」の一員としてZineを出品

主な出版
2014 雑誌 「FOIL vol.4(2014)FOIL AWARD in KYOTO」作品掲載

Artificial S 5
心臓よりゆく矢は月のほうへ

麥生田兵吾 mugyuda hyogo

Gallery PARC

2018年9月7日🎫 _ 23日🎫

機材協力:大久保啓二、藤本隆行
設営協力:金サジ、仲川あい
印刷協力:加納俊輔
制作協力(映像作品):今岡史甫

麥生田兵吾(むぎゅうだ・ひょうご／1976年・大阪生まれ)は主題として「Artificial S」を掲げます。
この大文字の「S」は“Sense＝感覚(感性)”、“Subject＝主体”、あるいはEsは“Es＝無意識”などの複数の意を持ち、「Artificial S」とは「人間の手によりつくられた、人間が獲得し得る“それら S”」として位置付けられています。また麥生田はこの探求・実験・鍛錬として、2010年1月より今日まで、およそ8年以上に渡って、自身が撮影した写真をその日のうちにウェブサイト「pile of photographys」(http://hyogom.com)にアップする行為を毎日途切れることなく続けています。

麥生田はこの「 Artificial S 」を1～5章に分類しており、すべては「生死 死生」を表現の中に持っています。しかし、それは社会的制度に定義される一般化・制度化された「生・死」を主眼としたものではなく、『生と死の狭間にある「私」の在り処を問うために、この視覚の世界に折りたたまれたものを思考し、想像し、発見する』ことを目的に、つまり「今」を指し示すための極として見定められたものです。これにより麥生田は、「生」あるいは「死」を前景化させ、あるいは背景としながら、各章において「今」「見る」「私」の関係性に眼差しをむけてきました。

「Artificial S 1 / 眠りは地平に落ちて地平」(2016年)では、「生」からはじまり、生の最中にあることで名前を持たないワタシが、同じく未分化の世界の中で、ソレを「それ」として認識する時、そこに「死(可能性の放棄)」が生じ、引き換えに「わたし」を獲得することを、写真と写真、写真と非写真を組み合わせることで発見しました。
「Artificial S 2 / Daemon」(2014年)は、写真によって切り取られたイメージ(ただの世界)が、わたしの内にあるイメージ(想像の世界)と接合することで、「あるイメージ」(意味としての世界)を結ぶ過程(＝認識)を経験することで、『「私」に内在する原初的なイメージ(＝自我)』の在り処を発見しました。

「Artificial S 3 / 後ろから誰か(他 の) がやってくる」(2015年)では、鑑賞者を見つめる無数のポートレートの展示により、被写体(あなた＝客体)の眼差しと鑑賞者(私＝主体)の眼差しによる『見る × 見られる』の交錯の中心にレンズがある構造を明らかにするとともに、その眼差しを追う中で、いつしか「他者の眼差しの中にある私」、「私を見つめる私の眼差し」を発見しました。
「Artificial S 4 / 左手に左目 | 右目に右手」(2017年)では、『私の眼差しの中に交錯する主体・客体の埋没した関係性の発見』をテーマに、たとえば単なる「風景(世界)」とは、「私」と「他者」の眼差しの連続・反復によって現れているのではないかを発見します。そして、ではその世界(眼差しの連続)の中で「ワタシ / わたし / 私」はどこにいるのか?への問いがあらわれるものでした。

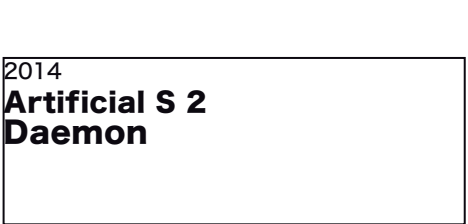
本展「Artificial S 5 / 心臓よりゆく矢は月のほうへ」はその最終章として、「死や虚無」をテーマに持つものです。

生にあるワタシは(生と死)を知らない。熱狂し、飛び出し、驚き、笑い、奔放に遊ぶ子どもの「生」は、いわば「生死」の混じり合ったものとして見る事が(あるいは思い出すことが)できます。しかし、次第に「死」は社会や制度によって「わたし」の外部に「見える」ものとして見出され、指差されます。それは「私は私の死を経験不可能である」ことによる「知ることでできなさ」への恐れからかもしれません。(私の)死は(私の)生から引き剥がされ、「見る(見える)」対象として(私の)外に置かれることで、(私の)観察可能なものとなります。私はワタシを外に置き、そこにわたしの眼差しを向けています。そしてまた、その眼差しの中心点を「私(＝主体)」として、それを始点(視点)としています。
「死」という非知(非・知)の闇は、生との境界線に立てられた扉の「向こう」にイメージされ、私は眼差しを向けます。しかし、その眼差しはいつしか死という看板が掲げられた「扉」へと対象を移します。しかし、元来その闇は、その死(生)は、その生(死)は自分の内にあったものです。では、ここで「見る」眼差しを向ける私はなんなのでしょうか？ 私は何を見ているのでしょうか？

本展において麥生田は「見る(私)」という主体を疑うこと」について、「目を閉じてみる」ことを促します。その上で「私はつくられた私であって本当のわたしはもっと内に、もっと奥にあるのではないか」という問いとともに、「目を閉じて。そして見る。」眼差しの在り方を写真による経験として提示します。

5年におよぶ「 Artificial S 」という主題に迫り、あるいはその向こうに眼差しを向ける麥生田兵吾の「今」への問いとともに、私に交錯する「私の眼差し」を体験いただければ幸いです。

麥生田兵吾
Artificial S 1〜4ステートメント
（展覧会開催順）



主題「Artificial S」。
 この主題は 5 つの章に分けられています。この展覧会はその 2 章目の” Daemon”。人の心におさまっている正体を定めないイメージ＝daemon をみつけます。

たとえば、心をピタッと変わらないままで伝えようとすれば、向うへ届くまでの間でポロポロとたくさんのが嘘のほうへ落ちていきます。嬉しい事を“嬉しい”と、悲しい事を“悲しい”と、かっちり決まった言葉を使っても、大きい小さいはあるものの喪失感を覚えます。りんごを「りんご」と届けても同じようです。

写真も同じようなことが起こります。対象が光学的なものであれば写真にはできませんが、“このりんご”と” 写ったリンゴ（写真）”は異なり、“見られて了解されたリンゴ”もまた異なります。そして写真はリンゴの姿の痕跡として大変強い確かさを与えますから、それぞれ在るはずの差異を見えにくくしています。

言葉も写真も嘘をつきます。ですがこれも嘘です。事物には嘘も本当もなく、ただ在るだけなのだから。意味などきつとないのです。

私はある精神的にまいった時期がありました。いよいよ心が酷くなった頃に見ていた景色は”意味”がありませんでした。リンゴはただリンゴで、コップはただコップで、りんごとコップに何も違いはなく、その違いのなさにも違いはなかったのです。文字通りの意味のない世界です。

そのような世界で写真は必要はありません。もちろん在ってよいですが写真を発見することはできないでしょう。ですからわざわざカメラを持ち出しシャッターを押す必要などあるわけがありません。完成した世界、静止した世界でした。ただそれを決定しなかったものは命です。私の小さくなった心臓が、静止した世界で動いていました。私は私の生で一番最後となる覚悟をしなければいけませんでした。

私は命を信じます。

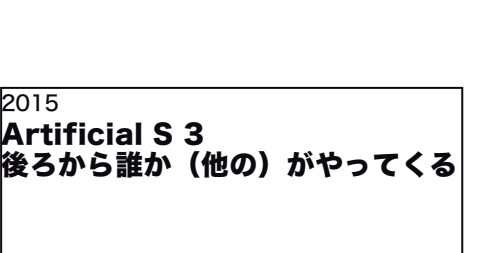
命は静止する事から抵抗し、世界を見ます。見ることで意味を生みだすのです。見つけるのです。この世界は不可能で覆われてる真っ暗闇です。しかし命は、手探りする事だって恐ろしい闇をビリビリ切り開いて進んでゆきます。この力は想像力です。スプーンを持ち上げる事だって、階段を降りる一歩だって、歌うこと、踊ること、これらは全て想像力によるものです。想像力こそが不可能を「ソナナ事ハナイ」と否定し続けられるのです。（こういった理由から、シャッターを押すという所作からすでに意味を感じていますので、私は写真家と名乗らずにいられません。）

嘘や本当という話に戻りますと、実はそんなことはどうでもよいのです。ただ、そのどうで

もよいことから学ばないといけない事は、言葉がただ言葉であり、写真はただ写真であるということです。

私と他者との間にある点「・」、それが言葉や写真です。その「・」は正しかったり正しくなかったりしませんし、だから良いも悪いありません。ただ、お盆にのったものをドンガラガッジャンとやってしまうような行儀の悪い「・」であればよいなと思っています。

本展の「・」は「daemon」です。みなさんは何を見つけてくれるでしょう。



わたしは写真の前に立っています。わたしが立つここに、あなたは来てくれて、そして同じに立つのです。あなたは「わたしはここに立っている」、わたしと同じにそう思うことができます。

わたしはあなたのことをよく知りません。あなたもわたしのことをあまりよく知らないでしょう。そして写真の「中」（＝情報）に写る一人一人の殆ど全員を、あなたは（実はわたしも）全く親しく知りません。名前も知らない人たちです。そんな彼らが四角い写真の「中」（＝情報）にいます。しかし、わたしとあなたと同様に、誰かに呼ばれる名前をきっともっています。名前は個人の断片です。それにその個人そのものでもありません。名を呼ぼうと一瞬息を吸う、それよりもっと一瞬の断片。

この場（主題：Artificial S）において、断片とは写真です。ここでの断片＝写真は、ひとつ時間の線に連続します。ですから、それらが連続連鎖して生まれてくるストーリーはありません。複数の断片＝写真は、ひとつの壁、テーブル、空間の断面に置かれます。ある季節の、ある陽の高さの、影の長さの、ひとつの時間の断面に、置かれます。“今”に置かれています。

“今”は、肉体に應對して出現するように感じています。肉体は、記憶（アーカイブ）のように収まった情報ではなく、常に未知の情報にさらされています。記憶を持った肉体と未知との境界に、空間が現れます。その空間は広大でありながら、厚みのないものです。そのあり方の感じは、写真のあり方を考える時に口の中に広がる味に、大変良く似ています。

わたしもあなたも、同じ写真の前に立ちます。わたしとあなたは、手を繋ぐことも面と向かって言葉を交わすこともありません。“わたしたち”ともくくれない関係ですが、しかし同じ写真（同じ場所）を前にしたなら、あなたとわたしは、別の時間と空間で重なることになります。重なるあなたをわたしは想像します。わたしのかぎりにおいて。

わたしの中に現れるあなたは、あなたに間違いありませんか？（しなくてよい質問ですが、尋ねてみたいです。）

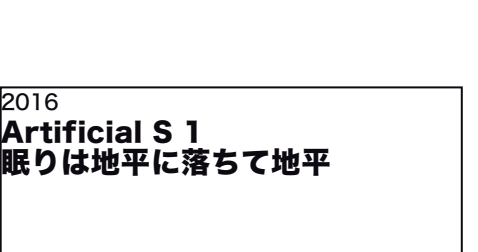
わたしは、不安に思うこともなく、私の中に現れるわたしを、私で間違いないと答えられません。

わたしはその不可能さがおもしろいです。感じるのではありません。不可能さそのものになるのがおもしろいのです。ほらこうなんです。わたし、パッパラパーなんです。

あ、そういえば、よく知らないどころか、わたしはあなたに会ったこともありませんでした。

ここまでずっと、わたしの中に現れているあなたは、一体誰ですか？

わたしを思うわたしは誰ですか？



私は知っている。誰かがわざわざ言うまでもなく世界は在るということ。朝起きて目覚めれば世界は在って、家から外へ出ても世界は在る。突然雨が降ってきたからといって世界は揺るぎはしない。

いたるところに世界はある。私の世界。私たちの世界。いたるところ……と、つい口から出てしまっただけれど、そのとおりで世界はひとつではなく複数ある。世界はひとつではない、これは「私」がひとつでない可能性をも暗示している。

どうしたってある世界は、人の気持ちの良し悪しといったような感性的経験によって世界はその存在を強く成長させるよう。経験は未来へ先立たないので、世界は過去へと向かって建築物のように組み上げられてはるはずだ。私たちの世界が遠い過去のどこかしらの地点にそびえ立つ構造物だとして、それが巨大に成長しすぎていれば、近さや遠さを錯覚することもあるだろう。遠すぎて感受・解像できずに細部を失いひとつの「世界」という単一な様子に化けてしまうこともあるだろう。感受・解像する感性は外部にたいして開かれているが、感性も経験によって養われているのだから経験されたことのないものに対して本質的に鈍感なはずだ。

私はこの鈍感さとのつきあいかたにいつも苦労する。鈍感さは何かを感受すると、それを“何か”にする。鈍感さに照らされるまで、“何か”と“何か以外”はひとつにとけあった状態だった。感受することとは物事を照らすことに似ていて、感受するということは影（照らされていないところ）をつくることでもある。鈍感さは、照らした部分を何かと判別するわけではない、照らされなかったところを自覚することもしない。

もしも私にその時々にも勇気を持つことができて、“何か”を“何か”のままに、“自覚できないもの”を“自覚できないもの”としてまんま受け入れることができたとしたら、私はようやく”今”という地点を足元に確認することができるだろう。躍動の中に私をおいておける。

命、それ自体になれる。生きている。

“今”へ至るまで回り道したけれど、とうとう眼前の世界に対して「あれは何だ？」と問う“ことができる”。

今降っている雨で考えよう。“今”にいる私は世界＝過去を問う。この問いがそのまま過去に向かっていなら答えは当然過去にあるだろう。

「知っている。これは雨だ。」欲望・期待されるような答えはおよそ全部が過去に属している。だけどもしこの問いに答えを見つけれられないのなら、答えのある場所は過去ではなく今から先の未来にある。「何だろう、わからない」（この時、世界＝過去は世界＝未来に反転してるやん）

雨を知らなければ、知るためには濡れなければならぬい。濡れるという経験が、問いそのものであり、“経験＝問い”そのものが「雨！」になる。問うということは未来に暗闇に足を踏み出すこと。暗闇に足を踏み入れているということは生きていうということ。脳裏に突然現れた暗闇の先に浮かぶ太陽。まだ進んでいける。

しかし、まあなんだか疲れる。世界は広すぎるし多すぎる。世界にたいしてどれほど問えることができるというのか。へとへとになったので気晴らしに想像してみよう。

今、降ってきたこの雨が、私のはじめての雨なんだと。はじめての雨？　すごいね。おどろく。何だこれ？　ってなる。ただの想像なのに楽しい。あれ？　でも雨ってこんなにやったっけ？想像からぬけた私は動揺する。知ってる雨が本当にはじめての雨になった。この雨は春の雨で、花を散らす重い雨で、新芽を芽吹かせる温かい雨。初めて経験する雨だった。おもしろい。

そうか、驚くんでいいのか。想像して驚き、そして経験して驚く。そうすればよい。

※曖昧になってたらいけないので最後にはっきりさせないといけない。世界をどうこうしているその主語は「私」「私たち」です。「私」は“麥生田”。なら「私たち」は“麥生田たち”？　なんかちゃう。

「“私”たち」のうちにある“私”は「私」とはいつも一致するわけではなさそうですね。



デタラメに言葉を組んでみました。「左手に左目」そして「右目に右手」。動詞も加えて、「左手に左目を持つ」「右目に右手を持つ」。主語も要る、「私は左手に左目を持つ」「私は右目に右手を持つ」。

これらの文で表現されていることはどちらも実際にはできないと思いますが、想像を試みることはできる。

想像する。

あ、どうでしょう、これらの文を思うには、「私」の位置をそれぞれ異なるところに配置しないといけない。目は「私」の振る舞いの出発点になる。“見ている私”。

「私の位置」てなんだ？ってなるでしょうか。この言葉に表される位置を把握するには、だれもが「私」になって想像してみるしかない。

まず「私の左手」は、私の目の前のそして手元に見える。つぎに左目はどうか、左目は“私”に接続しているので、左手までこの左目を届けるには、左目を“私”から引き剥がさないとけない。

引き離されて“イメージ”となった”左目”を、私は注意深くにぎる。左手に持たれた左目は、確かに“私自身”なのだけれど、“私のもの”とも言えるようになり、他者としての色を帯び始める。見る側だった左目は、私に見られる側に、どうしようもなく成った。そして左目からの視界は、遠く霞んで余所余所しくなっていく。何にせよ、「左手に左目を持つ」を持つことに成功した。想像だけど。

そんで今度は右のやつだ。右目、“右目に右手を持つ”。難しい。でも想像なので、やってできないことはない。では、やります。右手をじっと見つめて…はいっ、右目は右手を持ちました！　右目はギュッと右手を掴んでいます。右手が痛いくらいです。でも右目で右手を持つものだから、目の前が塞がって右目では右手以外何も見えません。

この姿を確認できるのは、左手に持たれた左目だけです。左目は、じっとこちらを見ているのですが、右目ではそれが見えません。左目の映像は白々しく、右手の痛みも全く共有できず、いよいよ遠い他人になっている。左手は、徐々に乾燥していく左目の手触りにムズムズしている。

そんな余所余所しい左目と役立たずの右目ですが、眼球の身体的な距離でない、“左目”と“右目”の眼差しの出発点違いによって生まれる違和が、単一の眼差しではない関係し合う眼差し、ある位置から位置へと行き来し合う眼差しを生み出す。

この行き合う眼差し（私の位置）は、本来は異なる領域にあるはずだけど隠蔽されている「目の前（＝在るもの）と目の奥（＝記憶そして因襲）」の関係をおおびらにするのです。私のこのような内部の“私”の位置に在りかによって、“目の前”に在る他者の位置もかわりそして見え方がかわり、何かの物陰に隠れるものごとも姿を現します。

デタラメな話からでしたが、私は位置に気づくことで、距離が見つけて、そして私は「線」を引くことも覚ええました。線は視線でもあり、関係性でもあり、境界でもあります。

ここ――あそこ。ここから～あそこまでの線。ここまで～の「ここ」の線、あそこ～の「あそこ」の線。

この線のからあそこの線まで。よーーいドン！　すごいスピード！　どんどん加速する！「線」がみるみる世界を組み立てて行く！世界自身も追いつけない。

線を使うと領土が生まれてしまいます。領土は四方を眺め、四方を囲い、囲いは線で表現されます。

線で囲われた世界。世界は「世界」って言葉で表現されることで、世界って心に映る（世界って言葉が生まれる以前は世界はない。差異が無限だった）のとおなじ仕組みで、具体的な線で囲われた領域から、世界は私たちの目に風景として映るようになる。（それ以前はきっとただの眺めだった。ただと言っても見る見られるといった関係の溶け混じった家族のように親しみのある眺め）

しかし「世界」は言葉に風景にされた途端に、その世界の生き生きとした姿は言葉と風景の内側に隠蔽、抑圧され石油でできたような偽りの死の静寂を纏う。このような仕組みは破壊も脱出も不可能だ。だって言葉以前、風景以前に帰えったり忘れたりするわけにはいかないのだし。だから、私たちは生き生きとした世界を呼び戻すことができるすれば、それは「言葉」と「風景」からその中心からそれ自身から出発するしかない。ゴタゴタ述べるまでもなく、私たちはそうしてきた。

ただでです、現代においては、あらゆる物事が均一化されすぎました。差異を無視して無理矢理にでも均一化するのが、言葉や風景なのに、そのことを私たちは忘れてしまった。私たちの感じることに先行して言葉と風景があり、言葉と風景が私たちの感性を造っている。そして私たちは、2つある目がまるで一つしかないように思い込んでいて、だから反省のしかたもわからない。

言葉と風景をコピペみたいに途方もなく繰返した先に、私たちはいる。言葉と風景の「元」が、もはや遠すぎて見ええない。

あ　線も、言葉と風景と同じだ。線という形は、本当はない。鉛筆で引かれた線は、線を表現したものにすぎない。ただ違うのは線は「線という概念」を表現しているけど、言葉と風景は、概念だけでなく表現そのものを表現している。

話長くなりました。すみません。だから言葉や風景を生きるものにするには、「元」を振り返り思うことになるでしょう。

あ　振り返る必要もないかもしれない。

だって「元」は私たちの内部（目の奥の奥）に原初的にあるものなのだから、新しい「元」を見つければ良いのではないのでしょうか。弱々しいものでいいと思います。それを発見できれば、それを手がかりに遥か遠くの「元」も見つけやることもできると思うからです。ただし発見するや否や「元」はたちまち言葉化、風景化するので扱いが難しそうです。もしまた遠くへ失ったとしても、また見つければよいだけです。何度でも繰り返し続ければいいだけです。「私」は、どの位置にいるのか、それを知り感ることが大切です。そして位置は、一つの固定された視点からでは確認することはできません。

「元」が原初的に内部（目の奥の奥）あると言う理由は、「左手に左目 | 右目に右手」の振る舞いを思う事ができるからです。経験より先行する破綻した言葉を、生きるものに行っているのは、間違いなく私だからです。